## 説明文教材の系統性 -文章構造の検討を中心に-

## 石黒 由香里

#### 1. 本研究の目的

本研究は、小学校における説明的な文章の指導において、子どもたちの読みのつまずきとなる「難しさ」が、それぞれの教材のどのようなところにあるのかを明らかにするために、主に、文章構造について分析を行うものである。

現行の学習指導要領では、「国語科の 指導内容は、系統的・段階的に上の学年 につながっていくとともに、螺旋的・反 復的に繰り返しながら学習し、能力の定 着を図る」ことを目指すことを明示して いる。

小学校の〔説明的な文章の解釈に関する指導事項〕は、以下のとおりである。 [低学年]

時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと。 「中学年」

目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読むこと。

#### 〔高学年〕

目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすること。

これらの指導のために、「系統的・段 階的に」かつ「螺旋的・反復的に」学習 できる素材として提示されたものが、教 科書に掲載されている教材である。この 「系統的・段階的」「螺旋的・反復的」が、 実際の教材の中でどのように具現化され ているのかを明らかにすることで、子ど もたちのつまずきの要因を見いだすこと ができると考える。

なお、分析対象としたのは、

光村図書 小学校国語教科書 1年~6年 (平成22年3月検定) である。これを用いたのは、主に以下の 二点による。

- ① 3~6年生で、二教材構成の単元を 設け、「系統的・段階的」かつ「螺旋的・ 反復的」な学習のための新たな試みが なされている。
- ② 教科書の本文中に提出された自立語について「語彙表」(甲斐睦朗監修・松川利広編『語彙に着目した授業をつくる 語彙表編』光村図書 2011.2)が作成されており、付録CDにより、教科書に出現した語彙を各種条件で検索することができる。

分析対象とした25の教材名については、【〈つなぐ言葉〉の出現一覧】(68頁)に記した。以下、各教材は、教材名の前に付けた学年を示す数字と $\mathbf{A} \sim \mathbf{Y}$ の記号で示す(例:  $\mathbf{1A} = \mathbf{1}$ 年「くちばし」)。

#### 2. 〈つなぐ言葉〉の出現状況

子どもたちが文章の展開を読み解く際、留意する表現の一つに〈つなぐ言葉〉がある。〈つなぐ言葉〉の機能を理解することが、文や段落の関係性を理解し、文章構造をとらえることに有効であることは言うまでもない。ここでは、〈つなぐ言葉〉の出現状況を確認し、「系統的・段階的」に教材の中に提示されているのか、また「螺旋的・反復的」な学習が可能なように工夫されているのかを検証する。

なお、〈つなぐ言葉〉については、光村 図書教科書の記述、および語彙表の品詞 認定をもとに抽出した。

教科書では、4年生の二教材で〈つなぐ言葉〉を取り上げている。「文と文をつなぐ言葉」(4年下)では、接続語を「順接」「逆接」「並好・累加」「対比・選択」「説明・補足」「転換」の六つに分類し、機能を説明している。なお、「順接」「逆接」などの用語は示されていない。また「物事や考えをつなぐ言葉」(4年上)では、接続語の機能には触れず、様々な言語活動の場面を想定しながら、〈つなぐ言葉〉を分類し提示する。その中には、「初めに・次に・最後に」などの順序を示すもの、「このように・このことから」などのとりまとめの働きをするものなども取り上げられている。

そこで、国語辞書などで一般に接続詞 として示される語の他、文章の展開を支 える表現も〈つなぐ言葉〉として取り上 げることにした。

出現一覧表(68頁 【〈つなぐ言葉〉の 出現一覧】)から、以下のような点を指摘 することができる。

- ① 1C・4M・4O・5Qを除く21教材で、新しい〈つなぐ言葉〉が出現しており、語彙を増やそうとする配慮が見られる。
- ② 3年生までの教材に出現する〈つな ぐ言葉〉は、その大半が、以後の教材に も繰り返し出現するが、4年生以降の 教材に出現するものは、一部を除いて、 その教材のみの出現となっている。
- ③ 「まず」「つぎに」「さいごに」などの順序を示す〈つなぐ言葉〉が、低・中学年に多く出現する。学習指導要領で、低学年に「時間的な順序や事柄の順序」を考えて読むことを求めていることが影響していると考えられる。
- ④ 2E・2H・3J・3K・4Mは、「このように」を用いて〈まとめ〉の段落であることを示す文章構造になっている。なお、4N・4O・6Wの用例は、〈なか〉のまとめに用いられている。
- ⑤ 高学年になると、文章が長くなり、 話題が移り変わったり、説明される内容が複雑になったりするため、「では」などの話題の転換を示すもの、「つまり」「ただし」などの補足説明を示すもの、「これに対して」などの対比的な説明を示すものなどが出現する。
- ⑥ 小学校の説明的な文章は、「です・ます」の丁寧体で書かれているものが大半であるため、〈つなぐ言葉〉にも口語的な表現が見られる。

以上のことから、〈つなぐ言葉〉については、おおむね「系統的・段階的」に教材に出現するよう配慮されていると言えよう。ただし、限られた授業時間内で扱うことができる教材数は多くないため、「螺旋的・反復的」な学習は、教科書教材以

外に委ねられることになる。

### 3. 文章構造の系統性

説明的な文章には、筆者がその文章を 通じて読者に伝えたい事柄が、明確に示 されている。その伝えたい事柄をどのよ うに述べるのかが筆者の工夫であり、そ の結果、様々な構造をもつ文章が生まれ る。

ここでは、教材の文章構造について検 討することで、「系統的・段階的」に読解 力の育成がはかられるよう、教材の内容 や配置に工夫がなされているのかを検証 する。

#### [1年生教材]

1A~1Dはすべて〈問い→答え→答え →答え〉の列挙型の文章である。

1A・1Bでは〈問い〉の内容が一つであるのに対し、1C・1Dでは、「……。そのため、……」「……。そして、……」という形式で、二つのことがらを〈問い〉に盛り込んでいる。

また、1Aでは、「これはなんのくちばしでしょう」という〈問い〉に対し、〈答え〉はすべて「これは、〇〇のくちばしです。 〇〇は、……。そして、……」と、同じ形式で説明する。同様な説明形式の統一は、1B・1Cでも見られる。

これが、1Dになると文章量も大きく 増加し、三つの〈答え〉すべてで、動物の 赤ちゃんの様子と成長を、「外見→移動 →食事」の順で説明するという、説明内 容の統一ははかられるものの、形式の統 一は見られなくなる。

このような〈答え〉における形式や内容の統一は、〈答え〉に書かれている内容の読み取りを助けることが第一の目的で

あるが、統一により、列挙された三つの 〈答え〉の比較が容易になり、違いに目を 向けながら理解する力を養うことにもな る。

#### [2年牛教材]

 $2E \sim 2G$ は〈話題の提示→時の経過に 従った説明  $(2E \cdot 2F)$ ・手順説明 (2G) → まとめ〉の、2Hは〈問い→答え→答え→ 答え→まとめ〉の、尾括型の文章である。

〈問い→答え〉ではない文章構造は2E が初出である。2Eではたんぽぽの様子 が、2Fでは動物園の獣医の仕事が、とも に時間の経過に従って説明される。2E は、「二、三日たつと」「やがて」「このこ ろになると」と時を示し、それぞれのた んぽぽの様子と、そのような様子になる 理由を説明する。「時→様子→理由」を繰 り返しながら、〈説明〉が進められ、「この ように」という〈つなぐ言葉〉で〈まとめ〉 を提示している。2Fの〈説明〉には、その ようなパターンは見られないが、「ある 日の…しごと」と〈話題〉が提示され、「朝」 「お昼前」「夕方」「一日のおわり」と、一日 の仕事が時間の経過に従って語られ、「こ れで……一日がおわります」と〈まとめ〉 が示されるので、文章量はかなり増加す るが、子どもたちには読み取りやすいと 思われる。

2Gは、25教材中で唯一、手順を説明するものである。順序を示す〈つなぐ言葉〉を、「まず→つぎに→それから→こんどは→さいごに→これで」のように意識的に用いることで、その機能を理解し、自身の表現に使用できるようになることを目指していると思われる。「しかけカード」や作業の手元の写真が示され、説明文中にも、「上のしゃしんは」や「しゃし

んのように」など、写真を参照しながら 読み進めることを促す表現が見られることも特徴の一つである。

2Hは、1年で学習した〈問い→答え〉型の構造であるが、末尾に〈まとめ〉が置かれている点が新しい。また、三つの〈答え〉は、説明のパターンが「遊び方→理由」のように統一されているが、三つ目の〈答え〉には補足の説明があり、これまでに学習したものを少しずつ発展させた構造になっている。さらに、〈まとめ〉には、小学校の説明文教材の特徴の一つである、読者である子どもたちへのメッセージが、明確に示されている。

#### [3年生教材]

3**I・3**Jは〈問い→説明→答え〉の、 3**K・3**Lは〈話題の提示→説明→まとめ〉 の、尾括型の文章である。

3I・3Jは、同じ構造を持つ文章を二 つ並べ、二教材で一単元となっている。 3Iで学んだことがらを生かして3Jの読 解を行うことで、読解の手法の定着をね らったものである。「イルカ」「あり」と、 いずれも動物の行動を素材に、これまで のように〈問い〉に対する〈答え〉を列挙 するのではなく、〈説明〉を重ねて末尾で 〈答え〉を示す、典型的な問題解決型の文 章構造となっている。〈説明〉では、理科 的研究手順の基本である「調査・観察→ 結果→考察」という形式が繰り返され、 研究が進んでいくありさまがわかりやす く述べられている。なお、「段落」の概念 は3Iが初出であり、〈はじめ→なか→お わり〉という段落のまとまりを意識した 読解を促すのも、これが初出である。

3Kは、〈話題の提示〉の文章量がこれまでより大幅に増加している。〈はじめ〉

に当たる部分が長い文章は、これが初出である。〈説明〉では、「食べ方の工夫」を、「(いちばん分かりやすいのは)→次に→また→さらに」と、〈つなぐ言葉〉を段落の冒頭に置きながら四つ説明し、五つ目は、「これらのほかに…」と、段落冒頭で他の四つとは異なる観点からの工夫であることを示した上で説明する。〈まとめ〉の冒頭には、「このように」という、これまでの内容をまとめることを示す表現が用いられるなど、段落相互の関係を読み取るには、段落冒頭の表現に注意を払うとよいことを学習できるようになっている。

3Lは、〈話題の提示〉から、この文章が 「かるた」について述べるものであるこ とがわかる。〈説明〉では、まず、〈話題の 提示〉で示した「いろはかるた」と「百人 一首」について詳しく説明する。次に、歴 史的な観点から、「かるた」の元になる遊 び「貝おおい」について説明し、最後に、 その他のかるたについて簡単に取り上げ ている。〈説明〉の中に、他とは異なる観 点からの説明が見られるのは3Kと同様 であるが、3Lの歴史的観点からの説明 は、〈話題の提示〉で述べられた「日本だ けの遊び方のくふう」を補足説明し、〈ま とめ〉の結論である「かるた=先人のち え」に導くという重要な役割を果たして いる。

#### 〔4年生教材〕

4M・4Nは〈話題提示(筆者の考え)→ 説明→まとめ(筆者の考え)〉の双括型の 文章、4Oは〈問い→答え→まとめ〉の、 4Pは〈話題提示→調査と考察→まとめ〉 の尾括型の文章であり、双括型の文章は、 4年が初出である。4Mと4Nは、二教材 一単元である。4Mでは、〈話題提示〉で示された「考えて呼吸をすると、もっと体の力を引き出すことができます」という筆者の考えが、身体機能についての詳細な〈説明〉を通して、〈まとめ〉では「呼吸を意識することで、筋肉はより大きな力を出すことができます」と言い換えられ、より科学的な説明に深化している。

4Nでは、〈話題提示〉で示された「『まず動く、そして考える』ことが大切です」という筆者の考えが、〈説明〉で、筆者の経験に基づいて得られた考え方であることが順序立てて説明され、〈まとめ〉では、「成功や失敗をくり返し、工夫を重ねていくことで、あなたにしかできない方法が、きっと見つかるはずです」と、子どもたちへのメッセージとしてまとめられている。読者は、筆者の経験を知ることで、筆者の考えを受け止めやすくなるといえよう。

40は、〈問い〉で「アップとルーズでは、 どんなちがいがあるのでしょう」と、違 いを問うているため、〈説明〉では、「アッ プレーズが比較され説明される。 また、「テレビ」に類似したものとして「新 聞(写真)|を取り上げ、アップとルーズ の選択が、映像メディアに共通して行わ れることであることを述べる。対比や類 比の関係に目を向けて、文章の内容を読 み解くことが大切である。また、〈問い〉 はアップとルーズの違いであるが、題名 に「アップとルーズで伝える」とあるよ うに、筆者の主張は、情報の発信の姿勢 にあるので、〈まとめ〉には、情報の送り 手としての筆者の主張が述べられてい る。

4Pは、教科書では「科学読み物」と位

置づけられており、文章量もこれまでの教材に比べ、かなり多い。そのため、1行空きにより本文を三つのまとまりに分けている。この提示方法は、説明文教材では初出である。研究者自身による調査報告であるが、〈現在→過去から現在にいたる調査報告→現在〉という時間軸で構成され、文章の冒頭と末尾とをつなげ、新たな謎に挑み続ける研究者の姿勢を伝える工夫がなされている。「あざやかなぐんじょう色の海は、白い船体を青くそめてしまいそうです」など、文学的な描写も見られ、これまでの説明文教材とは趣を異にする。

なお、40・4Pでは、写真や図を参照させながら説明を進めるが、これは2G以来である。以後、写真や図表を取り入れたものが多く見られるようになる。 [5年生教材]

 $5Q \cdot 5R$ は〈話題提示(筆者の考え)→ 説明(事例・事例の展開)→まとめ(筆者の考え)〉の双括型の文章、5Sは〈第1の問いと答え→第2の問いと答え→第3の問いと答え→まとめ(筆者の考え)〉の、5Tは〈話題提示→説明(3つ)→まとめ〉の、5Uは〈話題提示→説明→まとめ(筆者の考え)〉の尾括型の文章である。

双括型の文章は、4年に続き二度目であるが、二教材一単元の5Q・5Rの〈まとめ〉には、4年よりもさらに、冒頭で提示したものを深化・発展させた筆者の考えが示されている。また、二教材一単元は、3年・4年にも見られたが、これまでは二教材の文章展開は類似したものであったが、5Qと5Rは、5Rの文章が長いこともあり、〈説明〉の箇所に、5Qには見られなかった、読者の反論を想定した説

明や、仮説を立てそれを実証していく説 明なども見られる。

5Sは、〈問い→答え→新たな問い〉を 繰り返しつつ、筆者の主張へと導く文章 構成となっており、同じ尾括型でも、こ れまでのものとは論の運びが異なって いる。新たな問いを提示する際には、「で は」「それでは」という〈つなぐ言葉〉を用 いて、話題が移ることを示している。ま た、具体的な数値データを表やグラフで 示したり、写真や図を用いることで説得 性を高めている。

5Tは、筆者が薬師寺再建に携わった 鍛冶職人の仕事ぶりを紹介するものであ る。文章は1行空きにより五つに分けられている。〈話題提示→説明〉では、薬師 寺に用いられていた釘の特徴が、三点に 分けて説明されている。この釘の特徴を 明らかにするため、古代の釘と真摯に向 き合う鍛冶職人の仕事ぶりを通して、〈ま とめ〉では、鍛冶職人の職人としての心 意気を語る。人物の紹介という点で、内 容は、これまでに学習してきた説明文教 材とは異なっている。

5Uは、〈説明〉の中で、まず、説明に用いる「強いつながり」「ゆるやかなつながり」という用語の定義付けを行う。そして、インターネットの長所について、具体的な例を挙げながら説明し、次に、逆接の「しかし」を用いて、短所を二点上げ、それぞれの対応策を示す。用語の定義付けや、長短両面からの多角的な説明など、〈説明〉における論の運びも多様化している。

#### 〔6年生教材〕

**6V・6W**は〈問い→答え→まとめ(筆 者の考え)〉の、**6X**は〈話題提示→説明→ まとめ (筆者の考え)〉の、6Yは〈言葉の変化1→言葉の変化2→言葉の変化3→まとめ (筆者の考え)〉の、いずれも尾括型の文章である。

二教材一単元の6V・6Wは、文章に書 かれていることを読み取り、自分の考え を持つことを、単元目標に掲げている。 6Vは、「喜び・希望」などプラスの感情 に対置する「不安・後悔」などのマイナ スの感情の存在する理由を説明すること で、「多様な感情をもつ自分自身を認め、 受け止めていきましょう」と読者に訴え る。6Wは、「生き物」の特徴について「ロ ボット」と対比しながら説明することで、 「あなたが生き物として生きていること が、とてもすてきに思えてきませんか。 …他も大切であるという気持ちになりま せんか」と読者にメッセージを投げかけ る。〈まとめ〉における読者へのメッセー ジは、2年から見られるが、学年が上がる につれ、より訴える力が強く、読者に深 く考えさせるものとなっている。

6Xは、『鳥獣戯画』を読み解きながら、その特徴や文化的価値について述べるものである。文章の冒頭は、軽快な文体で、提示された絵の解説から始まる。形式段落の三において、「この絵は、『鳥獣人物戯画』甲巻、……国宝の絵巻物だ」と、何についての話であるのかが明かされる。読者の興味を引くよう、話題の提示方法が工夫されている。また、「ためしに、ぱっとページをめくってごらん」「それぞれが、どういう気分を表現しているのか、今度は君たちが考える番だ」など、教材文に掲載されている絵巻と文章が一体となった説明がなされている。「漫画の祖」「アニメの祖」という絵巻の特徴を具体

的に説明しながら、「人類の宝」であると、 歴史的文化財のもつ様々な価値を分かり やすく伝える文章となっている。

6Yも、6Xと同様に、文章の冒頭は、「カレンダー」「暦」の説明から始まり、形式段落の三において、「言葉が変わったことの背景には、日本人の暮らし方の変化があったのです」と、この文章が、「言葉は動く」という題名に示された、言葉の変化について述べるものであることが明かされる。言葉の変化を三つの観点から説明し、古い言葉も大切だという筆者の主張を導いている。具体的な説明から結論へと導く文章構造も、6Xと同様である。

#### [まとめ]

低学年では、文章の構造を数種の型に限定することで、内容を把握しやすいよう配慮している。学年が上昇し、より複雑な思考が可能になると、文章の構造も多様化し、細部の説明の方法などにおいても、筆者の様々な工夫が見られる文章が教材となっている。〈つなぐ言葉〉と同様に、文章構造においても、「系統的・段階的」「螺旋的・反復的」を意識した教材の選定・配列が行われていると言ってよいだろう。

#### 4. おわりに

以上のことから、教科書教材の説明的な文章は、その文章構造において、おおむね「系統性・段階性」が考えられた選定・配置がなされていることが確認された。説明文教材は、書きおろしの文章であるため、既存の文章の教材化に比べ、系統化しやすいという面もあるだろう。

だが、低学年のゆるやかな段階性に比

べ、高学年では教材ごとに新しいバリエーションが含まれており、実践報告で、初読の段階で教材の内容や文章構造を正しく読み取ることができる子どもはあまり多くないと指摘されるのも、これが要因の一つであると推測される。

ある文章を読んだ際、筆者の主張は、なんとなくはわかるのだが、それがどのような根拠に基づいて述べられているのかが理解出来ないと、筆者の主張の正当性について、自ら検討することができないことになる。書かれていることがらが理解できればよいのではなく、接続語や指示語の機能、文末の表現などに意識的に目を向け、文章を「構造」というを観点から整理し、筆者の論の運びを確認する読み方の指導が重要である。

教科書教材は、そのような指導が行えるよう、選定・配置されていると言えるが、小学校6年間で学ぶ文章数は限られている。一つ一つの教材を文章構造という点からも十分に理解させていくことで、子どもたちが、日々の生活の中で文章を読む際に、また文章を書く際に、生かすことのできる読解力を育てていくことが大切であると言えよう。

(愛知学院大学非常勤講師)

# 【〈**つなぐ言葉〉の出現一覧**】 ※〈つなぐ言葉〉は、表の左から、出現順に並べており、機能等による分類 は行っていない。 ○: 文頭に出現 △: 文頭以外に出現

(つなぐ言葉) *太字は出現教材数が 5以上のもの。  学年 教 材 名 ★印は二教材構成単元。	1 そして	2 それで	3 けれども	4 だから	5 それでも	6 そうして	7でも	⊗ このように	9 すると	10まず(は)	11 つぎに	12 また	13 さいごに	14 ほかに(も)	15ところが
★印版—教材構成単元。 1年															Н
<del>  年</del>   <b>A</b> くちばし	$\bigcirc$														$\vdash$
B みいつけた		$\bigcirc$													$\vdash$
C じどう車くらべ		$\cup$												$\vdash$	$\vdash$
<b>D</b> どうぶつの赤ちゃん	$\bigcirc$		$\overline{}$		0	0								$\vdash$	$\vdash$
<b>2年</b>	$\subseteq$			$\subseteq$											
E たんぽぽのちえ			0				0								$\vdash$
F どうぶつ園のじゅうい		0		0					$\bigcirc$						Н
G しかけカードの作り方		0							$\frac{\circ}{\circ}$	0	$\cap$	0	0	H	Н
H おにごっこ	$\frac{1}{2}$	$\overline{\bigcirc}$						0			$\vdash$			0	
3年														$\check{\sqcap}$	$\widetilde{\Box}$
I イルカのねむり方★	$\overline{\bigcirc}$								$\overline{\bigcirc}$						П
Jありの行列★								0	$\overline{\bigcirc}$		0				П
K すがたをかえる大豆	$\overline{}$							0	$\overline{}$			0			П
<b>L</b> かるた	$\overline{\bigcirc}$	0	0								_	Ō			П
4年															
M 大きな力を出す★							0	0			0				П
N 動いて、考えて、また動く★	Δ		0			0	0								
O アップとルーズで伝える	0	0					0	0							
<b>P</b> ウナギのなぞを追って	0								0						
5年															
<b>Q</b> 見立てる★	0														
R 生き物は円柱形★							0		0	0	0				
S 天気を予想する												0		0	
T 千年の釘にいどむ	0				0	0			0		0				0
<b>U</b> ゆるやかにつながるインターネット	$\triangle$						0		0						Ш
6年															
V 感情★							0								Ш
₩ 生き物はつながりの中に★	0						0	0			0	0			Ш
X「鳥獣戯画」を読む	0		0	0			0			0					Ш
Y 言葉は動く															Ш
出 現 教 材 数	15	6	5	3	2	4	9	8	6	3	7	6	1	2	2

16 そこで	17しかし	18 さらに	19それにたいして	20はじめに	21 そのため	22 そのうえ	23いっぽう(で)	24 じつは	25ですから	26それなのに	27 つまり	28 では	29だからこそ	30 それとどうじに	31 それでは	32 それだけではない	33 これにたいして	34だけど	35ぎゃくに	36 こうして	37はんたいに	38たとえば	39とどうじに	40 それとも	41 しかも	42 ただし	43だとすると	出現種類数
																												1
																												1
																												0
																												5
																												3
																												4 3 7 7
0																												7
0	0	0	0	0	0																		_					6 7 6 6
		0			Ö	0																						6
							0	0																				6
	$\bigcirc$										_									_			_	_				8
	0																											3 8 5 5
	0							0		0																		5
	$\bigcirc$							0				0	0	0														2 10
	0				0										0	0												7
	O										0						0	0	0									11
	0	$\triangle$					0				0									0								8
			0																		0	0						4
	$\bigcirc$																						0					
											Ľ	0											Ľ	0	0			8 8 6
		0					0		0		0															0	0	6
4	10	4	2	1	3	1	3	3	2	1	5	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	